

にいかした

# 北から南から



## 自由民権と

## 仏教改革

長崎 明

一万円札に縁が薄いせいでもないが、最近まで福沢諭吉のことは、明治維新直後の自由民権論者という程度にしか頭になかった。

実は今から三十五年前、新潟大学長として初めて卒業式で学長告示なるものを述べることになったおり、学生部次長が齢若い私を心配して、福沢諭吉の「学問のすすめ」を参考にしてはと知恵をつけてくれた。まだ「学問のすすめ」も「文明論之概略」も読んだことがなかった私は、「ああ、そうですね」と軽く受け流してしまい、農学部出身にこだわって、クリスチャンでもないのに、聖書に載っているという「一粒の麦」の話をした。

それから十四年たって、どういふ風の吹き回しか、県知事候補になったときの第一声で「人民の、人民による、人民のための政治」のような県政をやりたいと述べた。これは一八六三年リンカーンが国立軍用墓地開設式に際して行なった演説の中の言葉で、民主主義の神髄を表現する名句として有名である。

リンカーン演説から九年後に、中村正直が翻訳出版したイギリス人スマイルズの「セルフ・ヘルプ」の中に「天はみずから助くる者を助く」のことわざがあり、その意は「よく自主独立して他人の力によらざること」とされる。今日、日米安保のもとで何でもアメリカの顔色をうかがう我が国の政治家に教えたものである。

これらの名言と肩を並べる形で、同じ年に福沢諭吉の「学問のすすめ」が出版され、その冒頭にうたわれた「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」が、民主主義の根幹を表わす言葉として知られている。私の推察であるが、福沢諭吉は他の二者の言葉を年



頭に置いていたのではあるまいか。

遠く離れた米英両国と明治維新さなかの日本との間に、このような交流があったにもかかわらず、その後の日本が帝國主義の道を歩むに至ったのは、いかに列強に遅れをとるまいとした結果だったとしても、遺憾千万なことであった。歴史に「もし」はないといわれるが、もし、これら三つの名句の意とするところが明治政府に容れられておれば、我が国はもっと違った歴史を築いたかも知れない。

私がこのことに気づいたのは、私事にわたって恐縮だが、数年前に父母を続けざまに亡くし、我が家の宗教である浄土宗の開祖、法然(一一三三〜一二二二)の教義をひもといてからである。法然は「南無阿弥陀仏」の念仏を一心に唱えてさえ居れば、どんな下賤の者でも、どんな大悪人でも、誰れでも往生できるよう阿弥陀様が導いて下さるとの教義を開いた。これを「念仏専修、他力本願」といい、大変な修行あるいは御布施を積まなければ往生できないとする従前の権力主義的仏教

界に大きな改革をもたらし、遂に追放の憂き目にあったとされる。とするならば、今から約八百年も昔の我が国の仏教界に既に自由民権の萌芽が生まれていたことになる。もっとも、私の両親の場合も、私たち遺族は念仏を唱えたこともないのに、お寺様に数十万円の御布施を差し上げて、戒名に院号をつけて頂き極楽往生を願ったしで、法然の教義に明らかに背いている。

私自身、そろそろ自らの生涯を閉じる心構えを持たなくてはなぞと思いつつ、仏教界の民主主義についてまでも想いを馳せている昨今である。

〈追記〉本稿は三つの名句および法然の教義を殊更に評価しようとするものではない。ごく気楽な随想として読み過ごしてほしい。

(ながさき あきら)

にいがた県民教育研究所理事長)

